埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

<Educational Reserch and Report> Bad Langensalza International Sculpture Symposium and Appreciation Education of Germany

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-07-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 森本, 昭宏
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/653

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

教育研究報告

ドイツ　バード・ランゲンザルツァ国際彫刻シンポジウムと鑑賞教育

Bad Langensalza International Sculpture Symposium and Appreciation Education of Germany

森　本　昭　宏
MORIMOTO, Akihiro

テューリンゲン州主催、ドイツ　バード・ランゲンザルツァ市（Bad Langensalza）植物園で開催された、第２回国際彫刻シンポジウムに参加招待を受けた。会期は2009年８月６日(木)から16日(日)の11日間、実制作日数は９日間。参加国はドイツ・フランス・ポーランド・日本の４カ国６名であった。このシンポジウムの「制作会場」・「材質と大きさ」・「道具と機材」・「主題と制作方法」・「彫刻の管理」及び「鑑賞教育としてのシンポジウム」について調査した。公開制作の様子、市民との交流、制作者の視点から鑑賞教育についてまとめた。

１．はじめに

テューリンゲン州が開催費用を負担して、ドイツの彫刻家ハインツ・ガンサーによってオルガナイズされた、第２回国際彫刻シンポジウムがバード・ランゲンザルツァ市（Bad La-ngensalza）植物園で開催された。会期は2009年８月６日(木)から16日(日)の11日間、実制作日数は９日間。参加国はドイツ・フランス・ポーランド・日本の４カ国６名。

このシンポジウムは単に彫刻作品の完成を目的とするのではなく、その制作過程を公開し活用するという形態の相互活用を活かした地域のワークショップとも言えるであろう。今回日本人１名の招待作家として参加した。

一般的に国際シンポジウムというと、会議場でのパネルディスカッションなど討論会のイメージが強い。しかし彫刻の制作を通した国際交流として、世界各国で国際彫刻シンポジウムは開かれてきた。[1)] 参加した彫刻家たちは、共有された時間と場所で制作することにより、それぞれの制作技術の向上に繋げる。

また、公開制作を通して、作品についての意見を広く市民（鑑賞者）と交わすことも、今日大切な要素となってきている。彫刻を媒体とした草の根的文化交流と言えよう。今シンポジウムも幅広い国際交流を目標として掲げていた。（写真１）

（写真１）来場者へ作品についての説明を行う彫刻家ハインツ・ガンサー（オルガナイザー）

開催地の地理的歴史的背景とそこに住む人々の価値観には深い関わりがある。

開催地テューリンゲン州は地理的にドイツの中心に位置し、州都はエアフルトである。古くは17世紀、30年戦争[2)] の戦禍に巻き込まれ、第二次世界大戦

キーワード：国際彫刻シンポジウム、鑑賞教育、パブリック・アート、ドイツ
Key words ：International Sculpture Symposium, Appreciation Education, Public Art, Germany

では、州が分割・統合を繰り返してきた。2009年は「ベルリンの壁」崩壊から20年目という節目の年でもあった。シラーやゲーテ、バッハといった文化と古城や森に魅了される美しく歴史のある州である。

バード・ランゲンザルツァ市は州都エアフルトから北西に約30Kmの場所に位置している。名前の由来のバードは温泉を意味し、市内にはリハビリセンターが整備され、ヨガ等が盛んな保養地として有名な街である。閑静な街並みには街路樹と水路が張巡らされ、ゴシック建築の教会が街の中央に聳え立っていた。様々な歴史の変遷の中にも、人々の心に花や木々といった自然と景観を大切にする文化が根付いていると感じられた。彫刻のシンポジウムが開かれ歓迎されていることや、人々との交流から、文化・芸術を愛する心の豊かさを感じた。

２．大会の流れ

（１）制作会場

バード・ランゲンザルツァ市の植物園は、世界の多くの国の木を保有する大植物園である。草花・芝生・大木など、みごとなバランスで庭園が構成されている。庭園内には教会St.Trinita-tisが併設され、日本原産の銀杏や杉なども植樹されていた。会期中音楽コンサートが開かれた時やイベント時は入園無料となり、多くの市民が制作会場に訪れた。

これまでに私が参加してきた国際彫刻シンポジウムの会場は、一般的に市民の集まる中央公園や街中などといった、人の往来の激しい場所で開かれる場合が多かった。ところがこの植物園は有料公園ということで、一般客は入園料を払わないと中に入れない。そのため、広く市民に公開する一般のシンポジウムと比較すると、来場者が少ないと感じられた。

作家[3)]のために、植物園の中では歩道に沿ってそれぞれの場所に大型テントが設置されていた。作家の休憩・日陰の役割と雨天時に作品に覆いかぶせて制作が続けられるようにという配慮である。テントの横には伐り出された原木が用意されていた。作家はそれぞれの場所でエスキース（下絵）を基に原木と対峙し、やがて制作を開始するのである。

（２）材質と大きさ

彫刻の材質は木材または石であり、私に与えられた木材は樫の木であった。過去に経験したことのある素材であるが、ヨーロッパの樫は日本より柔らかいと感じた。今回、木彫作家は４名、石彫作家は２名であった。事前に主催者側に申請した材質とデザイン（３つの方向：正面・側面・上面）に基づき制作する。材質の大きさが1.8mという基準であったが、作家のデッサンを基に大小様々な大きさの木と石が用意されていた。

（３）道具と機材

制作するための道具と機材は、基本的に参加者が持参する。ノミは全員が持参するものだが、機材は作家によって様々である。開催地近隣のヨーロッパの作家は自前のディスクサンダーやチェーンソーを持参することが多い。ヨーロッパのシンポジウムではいずれも会場にチェーンソーが数台用意されているが、必ずしもチェーンソーのメンテナンスが行き届いていると言えない。刃先を研ぎ直すのに時間を浪費することを嫌う作家は、使い慣れたものを車で持参する。また、ヨーロッパの作家は大会側から借りる場合でも、自分に合った機材を選択する能力に優れている。コンディションの良い物、排気量の高い出力のあるものから借りていく。機材に熟知している背景には、作家として仕事をする上で、スピードが求められるからであろう。経験値の高さと仕上げの速さは目を見張るものがある。ゆっくりとした制作工程では収入に繋がらないという生活背景があることも想像に難くない。また、電動の機材に不可欠な電源はドイツでは220Vである。日本製のものは直接使えない。使うためには変圧器とサンダーを持ち込まなければならないが、相当な重量となる。したがって今回はノミの本数とアラカン（磨き用やすり）を多めに持参して、私はチェーンソーを大会運営側から借りるという選択で会に臨んだ。

（４）主題と制作方法

国定公園の森林整備事業の一環として企画されたこのシンポジウムには「参加条件」という大会運営の規則のようなものが、事前に主催者側から通達される。申し合わせ事項を作家と確認しあう規則のようなものである。そこには制作に当たっての注意事項や運営側の求める内容が明記されている。「組織者により選ばれたデザインに沿って、作家はその作

品の最大限の状態（完成度）を目指さなければいけない。」[4]「屋外に設置されることも考慮して、天候や台座の安定性にも配慮が求められる。」[5] 以上のように安全面以外に制作時間、会期の流れ等が知らされる。

さらに「作家による主題の説明が会期中に望まれ、市民との積極的な交流」[6] が組織者に期待されていた。今回制作した作品（写真２）は植物園での制作を意識して、彫刻の台座を「地球」または「大地」に見立てた。人体（フォルム）は植物の「種子」または「幹」、女性の頭部に伸びた髪は「葉」「子葉」と意味づけた。母なる大地から「種→芽→幹→葉→実」となり、植物の成長過程を人の形に重ねて彫り上げた。

（写真２）「Sead leafe」材質：樫　58×70×202㎝

また、制作の方法では「彫刻は手細工に価値が置かれ、機械での作品仕上げは最小限に留める必要がある」と参加条件に明記されていた。このことは日本の手業に共通する考え方を示し、ドイツ人と日本人の価値観を探る上で興味深い項目であった。また見方を変えると、昨今の作家は機材に頼る傾向があるということを示しているのかもしれない。

（５）彫刻の管理

参加条件に「彫刻は完成後に組織者（社会）に委託され管理される。」[7] と明記されている。第一回の木彫作品二点がこの大会会場の植物園に屋外設置されていた。木彫が倒れないように、石の台座にアンカーボルトが打ち付けられている。木彫作品が植物園の緑の風景に溶け込み、調和を保ちながらも独自の存在感を示していた。

石の文化と言われるヨーロッパであるが、屋外設置の木彫を見かける機会が多い。長い年月を風雨の中で耐える材質としては、木の寿命は短いはずである。しかし日本で見かけるよりも、木彫の屋外設置作品がしばしば目に入る。それは景観と材質に対する認識、また文化や気候の違いも一因であると考えられる。もちろん湿度の低さも大きく影響していて、腐りにくい環境でもある。現に設置から二年が経過していた植物園の木彫作品に、劣化の様子が全く見受けられなかった。このことからも、組織が十分に管理を保てば、パブリックアート[8] としての安全面は、他の材質と遜色がないと言えるかもしれない。

他の作品はバード・ランゲンザルツァ市に隣接する国定自然公園とこの植物園に配置されているそうである。今回の大会作品も国定自然公園にほとんどの作品が設置される予定である。しかし、筆者の作品はバード・ランゲンザルツァ市内にある日本庭園に置かれることが、州の大会組織委員から初日に告げられた。「幸福の庭」（「KOFUKU NO NIWA」）と名づけられたこの日本庭園（写真３）は7,500平方メートルの敷地面積を持つ。日本の造園芸術の法則に瞑想的なものを融合させることに成功した庭[9] とドイツ観光局自慢の庭である。夜になると金閣寺を思わせるような幻想的なライトアップがされ、建物の中には茶室が設けられていた。生け花、盆栽、花見と象徴的な意味の込められた様々な風景が目の前に広がる見事な庭であった。植物園及び自然公園

（写真３）日本庭園「Japanischer Garten」

という背景を考えて構想を練った作品を突然日本庭園に設置するとの説明を受け、正直困惑した。作品をこの日本庭園に融合させることができるか自信が持てなかったが、初期のコンセプト通りに制作することに集中した。この作品は木彫が風化していく様を良しとしたコンセプトの作品であった。侘び錆びの日本文化と、時間の経過を意識したフォルムの追及を心掛けた。作品が風化することにより、日本庭園に馴染むことも期待した。

３．鑑賞教育としてのシンポジウム

国際彫刻シンポジウムに、ここ数年連続して参加する機会があり、学校教育との連携を多く見かける。今回も、地元公立の幼稚園児、小学生から高校生の観覧を受けた。鑑賞教育が幼児教育にも浸透していることにはとても興味深い。美術館等で幼児図書を閲覧してみると、ヨーロッパでは様々な芸術家の作品がとても多く紹介されている。マネ・ゴッホ・ルノワールなどの印象派から、遡ってダ・ヴィンチ・ミケランジェロなどのルネッサンス期作家まで幅広く作品が浸透していて、美術の教科書以外にも登場する。会期中ワイマールに観光する日があったが、そこで建築改修工事用テントにマネの絵が大きくプリントされている光景に出会った。（写真４）

会期中教員に引率されて子どもたちは彫刻作品の制作風景を見て回る。植物園をひと回りした後、自由見学の時間になった。中学生は教員から配布されたワークシートを持って、作家に質問して回る。木の種類・作品タイトル・作家の出身国・名前・作品のコンセプト等についてである。製作途中での鑑賞は、作品の完成がどのようになるのかとても興味深いようである。作家が完成イメージのデッサンを見せると制作途中の作品を見て納得していく生徒もいる。彫り終わったばかりの木屑の匂いを嗅いで、樹種を確かめようとする生徒。ノミやハンマーの形に興味を持つ生徒など様々である。後日教室に戻って、発表会が行われるのであろう。40分ほど会場を回っていたと思われる。別の日には植物園に隣接する幼稚園５歳児の訪問を受けた。（写真５）チェーンソーで簡単に魚を彫るデモンストレーションを行ったドイツ人作家ハインツは拍手喝采を園児たちから浴びていた。

（写真４）建築物にマネの「草上の昼食」をプリントされたテントが張られていた。

（写真５）幼稚園５歳児に折り紙を教えている筆者

子どもたちはここで本物に触れる喜びを味わい、作る過程を「見る」という体験をする。鑑賞者と作家が作品を通して心の交流を持つということはシンポジウムの大きな特色であろう。美術館に展示された完成作品を鑑賞することも大切であるが、作られる過程を共に楽しみ、双方向に触れ合うという「生きた鑑賞教育」がシンポジウムの中で行われる。引率の先生は何度も子どもたちに言葉掛けを行っていた。子ども達からいろいろと質問を受け、作家として気づかされることも多かった。シンポジウムにおける鑑賞教育として、貴重な体験であった。

４．おわりに

16世紀のドイツ彫刻家ティルマン・リーメンシュナイダーの木彫作品を美術館や教会で見る機会があった。その写実の流れを現代に引き継ぎ、独自のスタイルを確立しているドイツの木彫家達は、最後

（写真６）参加彫刻家の昼食風景

に彩色を施し見事な作品を完成させた。共に制作ができたことをとても光栄に思うと同時に学ぶことの多いシンポジウムであった。（写真６）

市民や子ども達に目を向けると、日々の生活の中で彫刻に触れる機会が多いと思われる。むしろ彫刻のある生活が日常となっている。教会の内外に建築の一部として施された聖人の彫像。門扉のレリーフ等々が身近なところに存在している。市民と語り合うことのできる彫刻シンポジウムの役割や人と街と自然との架け橋となる彫刻のあり方について、様々な想いが会期中に浮かんだ。教育文化交流の面から見た場合の、子どもを対象とした教育プログラムとシンポジウムの関わり方について。学校教育のシステムと鑑賞教育の可能性などである。また、制作者と鑑賞者、社会や地域との連携など、様々な観点からのアプローチについても課題として捉えていきたい。彫刻シンポジウムを通して、今後も更なる文化交流を発展させていきたい。

追記

シンポジウムの様子は地元チューリンゲン州の新聞「UNSTRUT-HAINICH-KREIS」に日々取り上げられていた。８月13日付けの新聞に筆者の作品が「特別に日本庭園に置かれる」ということと、「自然界の力強さを作品から感じる」と記されていた。

参加作家

１．Heinz Günther（ドイツ）木彫「バラの女王」《オルガナイザー》
２．Laetitia de Bazelaire（フランス）石彫「穀物の種」
３．森本昭宏（日本）木彫「Sead leafe」
４．Volker Sesselmann（ドイツ）木彫「トーマス・ミュンツァー」
５．Czeslav Podlesny（ポーランド）石彫
６．Wolfgang Schott（ドイツ）木彫

主催者　アネット・レーマン（ドイツ・テューリンゲン州政府代表）

注

１）1959年オーストリアで始まった７カ国11名による採石場での公開制作以来、そのシンポジウムのスタイルがドイツ、ユーゴスラビア、イスラエル、ポーランド等と次々に開催されて、今日に至ると言われている。 鈴木徹　井田勝己「日本における彫刻シンポジウムの現状　VOL.1」文教大学教育学部紀要、第30集、74、1996.
２）1618年から48年にかけて、ドイツを中心に行われた宗教戦争。新教と旧教の対立に起因する、ヨーロッパ最大規模の宗教戦争であった。
３）作家とは制作者であり、今回参加した石彫家や木彫家を含む。
４）５）６）７）文中の鍵括弧は本シンポジウムの参加条件・要綱を和訳したものである
８）公共的空間に置かれる作品を一般的に指すが、海野弘　北川フラム監修「パブリックアートの世界」平凡社54、1995.では「野外彫刻とどう違うのか。まずいえるのは、庭、そして都市の空間の中で語ることができるもの－中略－パブリックな空間に置かれて見られるというだけでなく、作り手の共同性、無名性をも意味している…」と表現されているので参照されたい。
９）ドイツ観光局公式サイト
http://www.visit-germany.jp/を参照